広範囲の口腔粘膜に認められた悪性黒色腫の例
第7回東北大学歯学会講演抄録

著者：菅崎 将樹・高橋 正任・福井 功政・岡田 みわ
       君塚 哲・小野寺 健・大家 清・越後 成志

雑誌名：東北大学歯学雑誌

巻：
号：
ページ：
発行年：

URL：http://hdl.handle.net/10097/31856
第 44 回東北大学歯学会講演抄録

日時：平成 15年 12月 12日(金)
場所：東北大学歯学部 B棟 1階講義室

1. Alendronate (Aminobisphosphonate) による IL-1 および TNF の炎症作用の増強と cedronate (non-aminobisphosphonate) による抑制

骨吸収抑制薬 aminobisphosphonates (aminobPs) は臨床応用において、炎症性の副作用をもつ。薬効はこれをマウスを用いて解析し、aminobPs は、その全身、炎症性であるのみならず、LPS による炎症反応を増強することを示唆した。興味深いことに、aminobPs のこれらの炎症作用は、non-aminobPs の cedronate や etidronate により抑制されることも見出された。今回は、IL-1 および TNF の炎症作用に対する alendronate (代表的 aminobP) の効果を、ヒスタミン合成酵素 histidine decarboxylase (HDC) を指標にして検討し、また、cedronate との併用効果についても検討した。

IL-1 または TNF によるマウス肝臓、肺、脾臓での HDC 酶活性を、alendronate は用量に増強し、alendronate のこの作用は cedronate により強く抑制された。IL-1 および TNF は感染のみならず、種々の炎症 (リウマチ関節炎などの自己免疫疾患、アレルギー、消化管との種々の炎症など) に関与することが報告されており、aminobP が投与される患者は種々の炎症性疾患を抱えている可能性が有る。したがって、上記の結果は、aminobPs の臨床応用には細心の注意を払う必要性も、および、aminobPs による炎症性の副作用の防止と軽減に、cedronate との併用が有効である可能性を示唆するものと思われる。

2. ヨウ素デンプン反応を応用した口蓋小唾液腺分泌量の測定

吉中光大輔、根岸 健、佐藤 しず子、庄司 隆明、笠原高明（東北大学歯学部口腔医学講座口腔診断学分野）

近年、口腔乾燥症を訴える患者を診る患者は増加傾向にある。口腔乾燥症は大唾液腺分泌よりも小唾液腺分泌に依存することが指摘されており、小唾液腺分泌量の客観的測定手法の確立は重要と考えられているが、現在、その臨床評価としてはガムテストやサクソンテストなどの大唾液腺分泌量の評価が主として行われており、小唾液腺分泌に関する評価はほとんど行わされていない。

我々は、これまで下唇小唾液腺の分泌機能を診断するため、ヨウ素デンプン反応を応用した新しい簡便な診査法を考察し、この方法が口腔乾燥症の検出に優れた臨床診断法であることを報告した。しかしながら、口蓋においては小唾液腺の分泌量が少ないために、これまでの方法では、分泌量を測定することとできなかった。また、口蓋小唾液腺は、小唾液腺の中でも、特に口腔乾燥症と関係が深いとの指摘もあるため、今回、口蓋小唾液腺分泌量測定への応用を試み、吸水紙の種類・大きさ、吸水紙の貼付時間・貼付部位などの検討を行った。その結果、口蓋小唾液腺の測定には1×1cmに規格化した高級書道紙を用い、ヨード溶液に浸しデンプン溶液を塗布した後に、隔日隔日10mmをすました薄紙と正中口蓋縦線が交わった部位に1分間貼付し、測定間隔は5分間隔とする最も適切な測定条件を得た。以上の結果より、ヨウ素デンプン法による口蓋の唾液分泌量の定量的測定方法を確立することができた。

3. 広範囲の口腔粘膜に認められた悪性黑色腫の1例

吉崎将謙、橋本正任、植村功政、岡田秀之、村田 由、野寺健、大口 清、植原成枝（東北大学歯学部口腔医学講座口腔外科学分野、*口腔病理学分野）

悪性黑色腫は、粘膜の浸潤、転移が比較的早く予後不良といわれている。今回われわれは、広範囲の口腔粘膜に認められた悪性黑色腫の1例を経験したので報告した。症例は68歳男性で、平成15年5月頃より左側上顎顎槽部の腫瘍を自覚し、6月5日に初診となった。初診時、左側上顎顎槽部上顎義歯に压迫された形で22×24 mm大の有茎腫瘍を認め、さらに上顎及び右側下顎顎槽部の粘膜に黑色斑、褐色斑を広範囲、散在的に認めた。腫瘍は1週間にで25×24 mm大となり増大傾向がみられ、顎槽部からの高さは約13 mmとなった。画像所見ではCT、MRIで左側上顎顎槽部に約30 mm大の病変を認め、Ga、Gd、FDG-PETシンチで同部位に集積亢進を認めた。また、CTで頬部の横断面像で顎洞中に腫瘍を認めめた。手術は全身麻酔下で右側上顎顎槽部に上顎義歯を含めて切除した。顎洞部には上顎骨を含めて切除した。術後も、術後1年後には再発を認めた。

結論：広範囲の口腔粘膜に増大する腫瘍を疑う患者には、できるだけ早期に手術を検討することを強く推奨する。
が保たれている。

4. 乳癌の口腔内転移症例

小枝聰子, 腦部崇之, 塚本裕行*, 大木 源*, 川村 仁 (東北大学大学院医学研究科口腔病理解剖学講座顔面外科学分野, 口腔病理研究学分野)

口腔領域の悪性腫瘍のうち他臓器からの転移は約1%を示しにすぎないが, 口腔以外に局在し転移していることも多く, 予後はきわめて不良である。今回, 乳癌の下顎骨内, 下顎骨への転移症例を経験したので報告する。患者: 初診時78歳。女性。既往歴: がん発症なし。食生活良好。現病歴: 2001年8月, 東北大学医学部附属病院口腔外科にて両側乳癌と診断され, その後, 両側下顎骨部の腫瘤, 疼痛を主訴に来院。現症: 全身所見: 老年性脱毛, 肩こり, 気息, 裡温, 腸鳴等はみられなかった。顔面外観: 右側顔面下1/3部に腫瘤を, 左側顔面下1/3部に腫瘤を認めた。初診時, 下顎骨部に触知腫瘍を触れなかった。口腔内所見: 左側顔面下1/3部に腫瘤が認められ, 下顎骨内に腫瘤を認め, 転移症例と診断された。今後, 乳癌の口腔内への転移症例について研究を進め, 下顎骨骨密度測定, 下顎骨骨密度測定, 下顎骨骨密度測定を併用した。従って, 乳癌の口腔内への転移症例について詳細な検討が進められている。

5. Jaeger切開による上顎骨・頬骨部悪性腫瘍へのアップローチ

齋藤瑞穂, 江口晃枝, 平野博明, 佐藤哲, 川村 仁 (東北大学大学院医学部附属病院顔面外科学分野)

近年, 上顎悪性腫瘍に対して, Quality of lifeを考慮した侵襲小の治療がなされている。その代表として翼上顎領域の浸潤に対し, Weber-Fergusonの皮膚切開が多く用いられている。しかし, 乳癌をはじめとする悪性腫瘍に対する上顎部の切開, 下顎骨内に腫瘤を認めた。術後, 乳癌の口腔内への転移症例について研究を進め, 下顎骨骨密度測定, 下顎骨骨密度測定, 下顎骨骨密度測定を併用した。従って, 乳癌の口腔内への転移症例について詳細な検討が進められている。

【症例】 69歳, 女性。乳癌原発巣および下顎骨内に腫瘤を認めめた。翼上顎領域の皮膚切開, 下顎骨内に腫瘤を認め, 下顎骨骨密度測定, 下顎骨骨密度測定を併用した。従って, 乳癌の口腔内への転移症例について研究を進め, 下顎骨骨密度測定, 下顎骨骨密度測定, 下顎骨骨密度測定を併用した。従って, 乳癌の口腔内への転移症例について詳細な検討が進められている。

6. アルゼネート印象の採得方法と保管方法の相違による

咬合再現性の臨床的評価

片岡康夫, 藤野太郎, 岡倉の部, 中村益, 松本正男, 松本公平 (東北大学大学院医学研究科口腔外科学講座特殊機能再建外科学分野)

アルゼネート印象を用いる際に, 印象の採取方法, 印象の保管方法の相違による咬合再現性の臨床的評価がなされる。アルゼネート印象を用いる際に, 印象の採取方法, 印象の保管方法の相違による咬合再現性の臨床的評価がなされる。アルゼネート印象を用いる際に, 印象の採取方法, 印象の保管方法の相違による咬合再現性の臨床的評価がなされる。

7. 智歯の萌出状態と症状との関連について

篠野正昭, 篠原正昭, 宮本武弘, 田中真司, 佐藤 裕, 乙智, 岩崎章明 (東北大学大学院医学研究科口腔病理解剖学講座口腔診断学分野)

口腔診断的な歯冠治癒を行う上で, 症状のない歯冠に対する治療方針すなわち予防的に拔歯すべきかどうかの判断に迷うことがある。そこで, 人口増加のあるEastern-basinを用いて, long-termの調査をすることによって, 智歯に症状が発現する確率を求めるため考えた。方法は, 東北大学大学院医学研究科卒業発表会において発表されたエクスペリメンタル歯冠治癒薬として, サンプル400名 (765歯) の調査を実施した。その結果, 智歯の萌出方向は, 上顎が, 垂直位 (84.4%), 前倾位 (97.9%) の順に多く, 下顎では, 垂直位 (46.0%), 水平位 (34.4%) の順に多くみられた。